

知的生産の技術5 20001106

八木先生の話聞いて
自分史を書くことが
楽しみになりました。反面
自分の事を隠すことなく
洗いざらし書くことに対する
不安も感じました

八木さんの話を聞いて
改めて今自分史を書くことの
必要性を感じました。若いうちに
できるだけ多くの事を思い出し
自分の進むべき道を
探っていきたい

中学時代のことが
今までで一番
たくさんのことを
思い出した

中学時代は今の自分の礎を作った時だった。
建築に例えるならこの時まで杭を打ち込み
コンクリートを流し込んだといえる。もちろん
その後、幾ばくかの増築はあったけれど
改築はなくこのとき流し込んだ
コンクリートの形通りに今生きている

八木先生の本を拝見して
パラパラと開いただけで
会話の部分が多いと思った。
情景しか覚えていない自分は
まだまだ思い出しが
足りない反省。自分の
嫌な過去や後悔していることは
寝る前などいつも思い出してしまい
悪夢を見ているようだった

学校で行われる
身体測定が
すごく嫌でした

今日家に帰ったら
親に自分の幼かった頃の
話を聞いてみよう。
そうすれば何か
思い出せるような気がします

中学に上がる時に
引っ越して別の県の
中学に入学したのだが
性格にも少し
影響が出たと思う

中学時代が
高校や現在の生活に
影響している部分が
多かった

タイプ
1

私は日本に来て私を失った。
私は自分自身の中に
私を閉じ込めた。
今こそ私を探す旅に出た。
この旅で私は本当の自由人になる!
絶対私を見捨てない。
私は私であることを発見する。
人生は今からだ。誰も私を防げない

自分史は電話で話すように
書けばいい」と
八木先生がおっしゃって
少し書けそうな気がしました

八木先生のお話を聞いて
自分の短所も
見方や考え方によっては
長所になるというお話には
共感を持ちました

年毎に思い出し月毎に思い出し
最後に一つ一つの事柄について
じっくり思い出す」という八木先生の
アドバイスにより、今日のメモは
大変中身の濃いものに
することができた

小学校より
やはり中学校の方が
鮮明に思い出された。
高校・大学となるにつれて
より鮮明に思い出されるだろう

タイプ
2

八木先生が「何でも小さなことも
思い出して書いてみる」
と言っていたが、私も何回か
自分の過去を振り返ってみて
小さなことが後の大きなこと
につながったりしていて、案外
小さなことが大事なことだと
思っていた

他人の人生を
見ることは
もう一つの人生を
疑似体験すること
なのかも知れない

私の家族は
天津の出身だから
今日の先生のお話は
大変感動しました

タイプ
3

自分はまだ八木さんのように
数百枚も自分史を書くことができない。
まだまだ甘いなあと思った

八木先生はすごい

心の中に私は
毎日全ての面において
私はますます向上している」
と念を唱えながら
生活を送っています。一日のうちに
自分自身を見つめ直す時間を作ると
自分の将来への展望が見えてくる

自分を
客観的に見てみると
どうやら八木さんと
瓜二つのようでした

八木先生は
なんか可愛い人だった。
中学校は覚醒中だった。
どんどん書けた。
まだまだ書ける

自分史を書くとは、自分のことだけ
社会を書く歴史を書く」という出だしが
印象的だった。また『将来』
になりたい』
というのは手段に過ぎない。そこには自分が
何をしたいのかが隠れている」という言葉。
私にとっては新しい発想でした

知的生産の技術5

20001106

久恒先生の授業を受けると
時のトンネルにいるみたい。

八木先生は
天津での生活を背景にして
本を書いたことを見ると
自分も仙台での生活を
書きたくなった

自分自身の思い出の
悪いことも思い切って書く
という話を聞いて
どんどん何でもいいから
書いていこうという
気持ちになれた

何気ない日常を
鮮明に振り返れることは
すごい能力だと感じた。
中学時代は人生で初の
ターニングポイントだった
はずだけど、情報不足で
いい加減なものになった

中学生時代は
部活中心生活だった。
とても懐かしかった。
内容の濃い中学時代
だったと思う

自分を良く知るために
自分史を書く自分を
上手く使いこなせるように
自分をもっと知ろう

中学校は、割と
思い出しやすかった

中学時代は
楽しにとが一杯でした。
部活・勉強の毎日
今までで一番充実していた

中学校の時、友人に
友達になりたい人
と言われショックだった

私は文章を書くことが苦手
で“自分史”なんてりだと思っ
ていた。八木先生がおっしゃ
った言葉の中に“思ったとお
り書けばいい!!”というのを
聞いて、私はちょっと“書け
そう”という思いが生まれた

神はいる!?

今日は時間が足りなかった。
中学時代はついこの前のよう
に細かいところまで思い出さ
れて全てを書ききれなかった

私の黄金期だったのかもしれない。
充実していた。
思い出に泣きそうになる程感動。
これからの人生でも中学時代のように
全てに頑張れる自分になりたい

タイプ
4

八木先生のお話は
大変参考になった。
“自分史なんて…”と
思っていたけど
あまり固く考えずに
自分の思った通りの
ことを楽しみながら
書いていきたい

八木先生は 今では
内向的な性格で
よかったと思う」と
おっしゃっていたが
私もいつか
そう思えるだろうか

タイプ
5

自分史を書くために
大切なことは、まず
自分が好きである
(あった時代がある)
ことだと思った

見つめること。
美化も卑下もせず
ありのままの自分を
見つめ直すこと

まだ自分と言うものを
突き放してみる
自己を客観化する
ということに対して
少なからず抵抗が
ありますが、自分の
全てをさらけ出すことが
逆に心の奥底に
いつまでも残っている
過去の呪縛から
開放されるんだという
先生の言葉を信じ
この自分史を書くことが
自分の変化の契機に
なればよいなと
思っています。

今、自分はどのような人間なのかを
見つけるという作業は、無駄なく
効率のよい人生を掴むことに
つながるとい言葉は、八木さんの
実体験からきている言葉
ということもあり私の心に
重くのしかかった

中学時代に、とても
ケンカすることを
好きになっていた。
やばかった?

今の人格形成の
元となった時期なので
自分史の中で
ウイトが大きそうだ

僕の場合は自分で思い出すより
家族や友達に聞いた方が
多くのことが出てくるような気がする

八木先生のお話を伺って
自分史を書く意義を改めて思った。
また、内向的な人は感受性が豊かで
繊細な心を持っていると
これまで自分の嫌な所として
捉えてきたけど、決してこれは
悪いマイナスなものではないのだと
思うことができた

映画館のプリントは
当たっていると思った。
面白い

八木先生のお話はすごく良かった。
自分史の書き方についても
こうすればいいんだと分かった。
先生が言ったように、人生の中で
自分の道を指し示してくれる人は
やっぱりいたと思う

自分史を書く際に
客観的に自分を見ることが
大事だと言っていたのが
印象に残っている

小学校が6年間で
中学校が3年間にも
関わらず、中学校の方が
何倍も思い出が多い

知的生産の技術5

20001106

ノスタルジに
ひたってしまった。
成人式の時に
中3の頃の
「立志の誓い」
とか言うものを
受け取り
20歳の自分に
語りかけてくる
文章だったが
やはり悲観的で
人生を
つまらないものだ
と当時よく考えていた
ことが分かった

タイプ 6

今年はずっと
自分に正直な
自分史を書こう
と思う自分史を
書いていると
楽しい思いや
辛い思いが
一杯やってきて
疲れます

中学生の時は
本当に自分自身
不安定でドロドロした
暗い部分があった。
自分史を書いたら
是非誰かに
読ませたいと思うが
やっぱり知られたくない
部分もあって複雑な気分

八木先生の話で
「自分に嘘はいけない」
という言葉が、再認識
という形で残っている。
「自分に嘘をつかない」
「自分を誤魔化さない」
これからも続けていこう

八木先生のお話は
大変参考になりました。
この世代の方々も、まるで
ドラマのような波乱万丈な時期や
体験を持っており一方で我々は
「朝起きて昼食とって夜寝る」
ような平凡な日常しかないため
「他の人が読んでも面白い」
自分史には成り辛いと思った

自分史を書くことにより
だんだん自分が
分かるようになる、
自分史といっても
自分だけでなく
その当時の社会に起きた事
周りの人々の事までも
書くことになるので
ある意味では、その時代の
歴史を書くことになる
という話が印象に残った

中学校は今振り返ってみて
細かくあおしてあげれば
良かったという事はあっても
全く本として悔いのない
生活を送っていました

タイプ 8

疑問があります。
普通思い出というのは
断片的なものでしか
思い出せず
それ以上考えようとする
創造してしまったり
美化してしまったり
するのではないです

中学は嫌いだったので
あまり記憶がない

中学校時代は
精神面の形成に
大きな影響を

今、男友達が多い方だというのは
中学校の時、すごい
仲の良かった女の子の
影響が大きいような気がする。
それと転校した時の
女子バス部が怖かったから
「女は怖い」というラウマが
できたのかも…

タイプ 7

いい事もイヤな事も
ありのまま書く
という事は
やっぱり大事だと
思った。イヤな事も
頑張ら
思い出していこう

中学の時は
ほんと
いろんなことが
ありすぎて
書くときりが
なさそうな
気がします

あの頃は
思春期だったなあと
つくづく感じた

自分にとって
マイナスと思っていたものが
実はプラスになるということが
私にもあるといいな

与えていたと思う
「恋愛」「友情」「憎しみ」
この3つが濃密につまっている。
子供と大人の境界線にいますので
子供心の純粋さと大人の我慢が
織り交ざり合っているジレンマが
原因だろう

八木先生が
おっしゃった
「本当の事を書く」
という事は、自分史を
他人に読まれることもあって
意外に難しいことだ

寂しい中学時代だった

タイプ 9

本を読んでみて
あんなにはっきり
多くの事を覚えているなんて
すごい記憶力だと驚きました

すごく自分の事を
覚えていて感心した。
自分の過去を振り返ると
時間が経つのが早い

中学の時が
私の転換期と
いう感じがした。
八木先生のお母さんは
千鶴子さんで
私も千鶴子だ

中学時代は
今の自分とは
かなり
違っていて
びっくり

中学時代には
友達とのケガや
悩みがとて多く
苦労も多かった
その分鮮明に
覚えていた

思い出が一杯出てきて大変

嫌な思い出とか
思い出したくない事に
向き合うことで
客観的に自分を
知ることができる…
という事に納得

知的生産の技術5

20001106

早く自分史を完成させて宝物になるようにしたい。HP見ました。どうやって作ったんですか?

中学時代の自分は弱かった

八木先生はタイプ9かな?

八木先生は記憶力がとても良いのでとても羨ましかった

八木さんの話を聞いて私の自分史についてもっと詳しく書こうと思った。またこれから自分はどうなっていくのかと思った

まわってきた本はあまり時間がなくてパラパラとしか読めませんでした。本当に細かい内容まで鮮明に描かれていて面白かった

自分のことを理解するということはとても難しい事だと思うが人に話して聞かせるほど自分を理解できたら素晴らしい。機会があったら「天津の日本少年」という本をじっくり読みたい

自分を一人の登場人物として見つめなさい」と言われたことがとても印象に残っています

それが果たして本当にあった事がそれとも「あった」と思い込んでいる事かと不安になった

実際に自分史を見て話を聞いて、ぼんやりと「ああ、こんな感じなのかな」というのが見えてきました

自分史を書くことで思い出を形として後世に残したい。作るなら最高の自分史を作りたい

中学生は部活の事ばかり思い出された。やっぱりあれが大きなウェイトを占めていたのだろうか

中学は皆と話しているとすごく荒れていたようだけれど私の中学はすごく落ち着いていた。今までの人生の中で一番努力する事が楽しかった

本一冊に15年間分がつまっていた。今更ながらあんなに長く書けるものなんだと感じた。中学になると小学校とは違い思い出も複雑になっているように感じた

小学校とは違い話題が恋の事などに移っていったような気がする

中学時代は私にとって人生の大きな転機だった

八木先生が「自分が何のために生まれてきたのか、神から何を使命に生まれてきたのか」と言われた事に何かハッとしました。職業はあくまで、そのやりたい事の手段であって、自分のやりたい事、その確信が大切だという事を改めて感じた。あせらないで自分に正直に生きていきたい

中学校時代は何といっても体力的にも精神的にも辛い部活だ。あんな辛い思いは二度としたくない

高校のこと思い出すのが楽しみになってきました

昨年も八木先生のお話を聞きましたが今回も心に残るお話で良い機会が持てた

来週は高校なのですごく楽しみだ。八木さんは子供の頃から顔が変わらない

自分史を書くことで自分のトラウマを

八木先生のタイプは4かなと何となく感じた

久恒先生はタイプ3だと思う

タイプ9

解消できればいいな。自分が「将来何をやりたいのか」という事を実現する手段が職業であるという事も分かった

中学の思い出は部活ばかりでした

八木先生の話は参考になった。もっと自分についてよく知りたい

本当の事を書くというのは心的に難しい。表と裏の2冊で構成してもいいですか? 久恒先生はタイプ1ですか? 自信はないです

中学生の頃は内面的に色々あった時期だった。引越しもしたし友達が変わった事や先生が変わった事も今日の私に影響を与えている

中学から毎日日記をつけるようになったので思い出す事は多かった。私も自分では良く覚えている方だとは思っていたがさすがにシミの形までは覚えていない

今日はたくさんの事を思い出した。その時に感じた不安や喜びなどとにかくたくさんを。とても楽しい時間でした

私も八木先生と同じ様に記憶力があるのかもしれない。それを全て書いていたら本当に果てしない量になりそう

自分史を書く手順が見えてきました。現在から過去の自分を見つめる」という言葉が印象に残りました。「自分史」を「自分だけ史」と少々勘違い気味だった